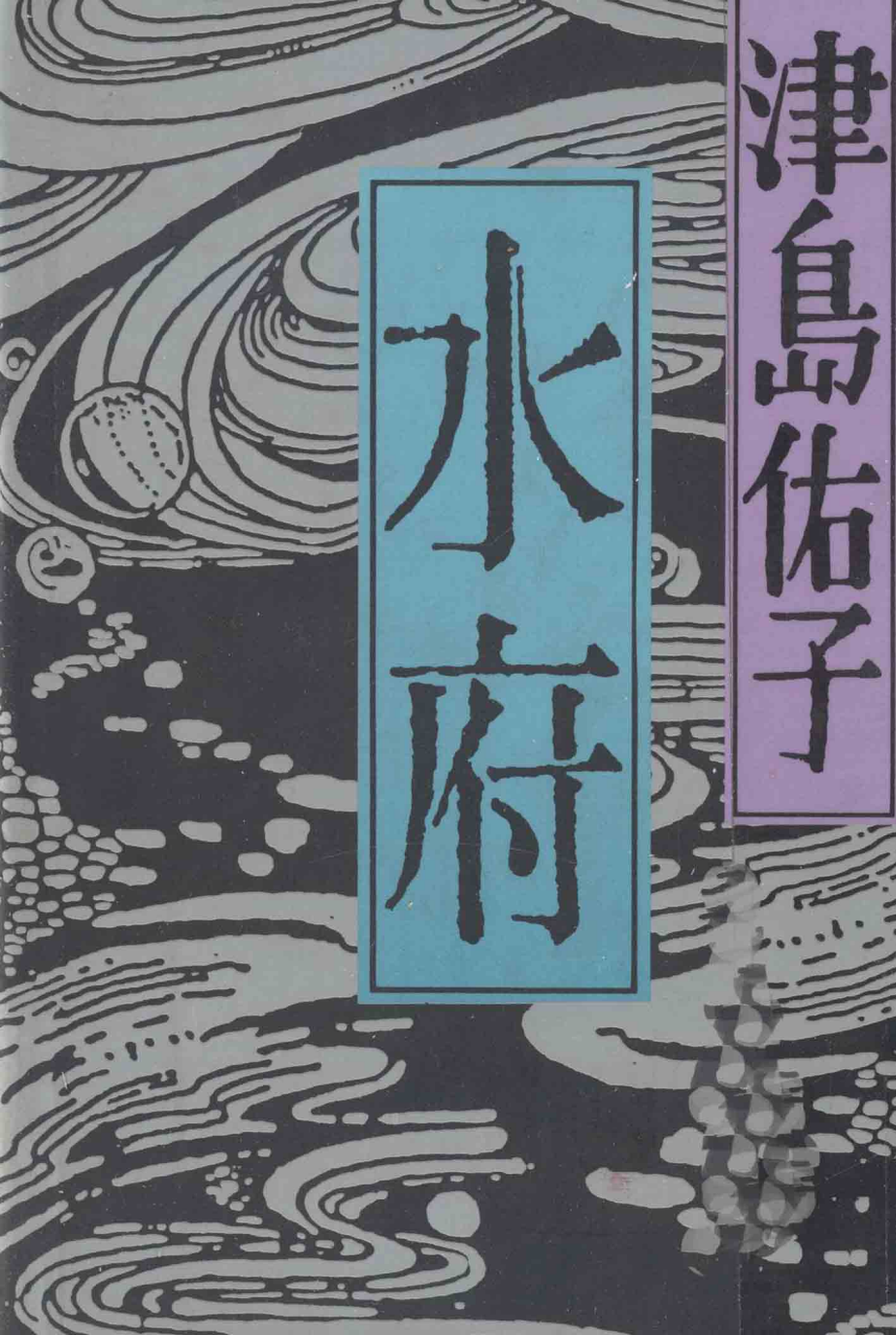


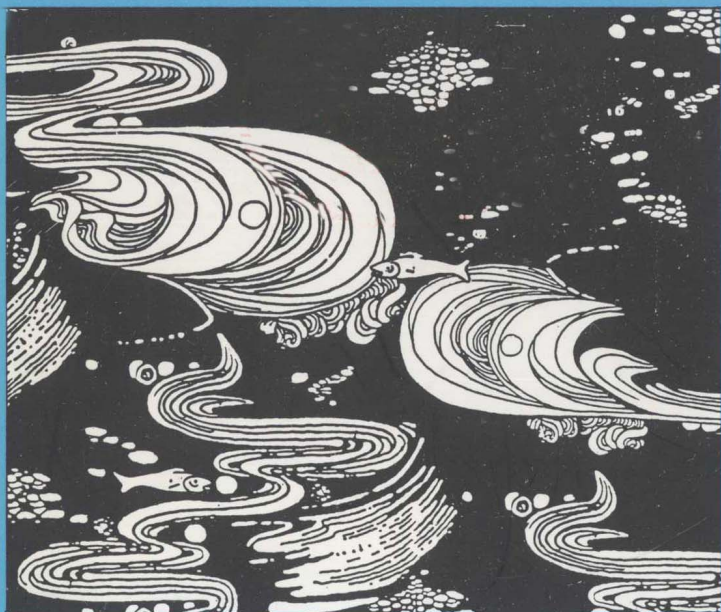
津島佑子

水府



津島佑子

水府



河出書房新社

水府

昭和五十七年九月二十五日 初版発行
昭和五十七年十二月一日 再版発行

著 者 津島佑子

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 四〇四―一二〇一(営業)
四〇四―八六一一(編集)

振替口座(東京)〇―一〇八〇二

印刷 三松堂印刷株式会社

製本 小高製本工業株式会社

©1982 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

水府	浦	番鳥森	多島海	ポーア	目次
173	135	91	47	5	

装帧 田村義也

水府

ボ
ー
ア

無数の動物が遠いところから怒り叫んでいた。いや、それとも違う音だった。深い森が風雨に騒いでいる。火山の溶岩が流れてくる。そんな音にも聞えた。

やがて、どこからともなく、低い男の呟きが聞えた。

へ……もうすぐです。身の毛がよだつ……

私は眼をつむり続けていた。

へ……ものすごい速さで、……こんなにおそろしいものが、……見えてきました、……まっしぐらに……

私は耐えきれなくなって、眼を開け、起き上がった。男の声も、どよめきも、まだ続いていた。テレビ。すぐに、そう気がついた。まだ寝呆けている体で、隣りの四畳半の部屋に移った。とつくに起きている子どもたちは、テレビの前で色紙を鋏で切り刻むのに熱中していた。

薄明の大河を川幅いっぱい突き進む一群の高波が、テレビに映っていた。それを私ははじめ、生きているもの、と見まちがえた。水を身にまとったけたはずれの生きもの。まるでひとつの狂暴な意志を持っているかのように、その巨大な水の壁は、次々に、静かな大河を猛然とさかのぼり、川岸の熱帯の木々を裂き碎いていく。それが過ぎ去って行ったあとには、もとの形を留めている植物はひとつも残っていない。どこまでさかのぼれば気がすむのか、と次第に改めて蒼ざめずにいられなくなるほど、その勢いは少しも衰えようとはしない。夜明け前の暗い大河に、波の群れの唸る声が響き続ける。密林が、大河を深く包みこんでいる。

それはアマゾン河に見られるボーアと呼ばれる川津波の現象だということだった。ボーアの破壊力を画面に映しだしている間、解説者の声も途絶えがちだった。ボーアという、生きものにつけられるような名前は、大河を唸りながらさかのぼっていく高波にいかにもふさわしいように、私には思えた。

河口の海が満潮になるのに従い、川に逆流が起こる。その逆流がなんらかの地形の条件により、そそりたつ壁のような高波に育ち、上流に突き進んでいく。波の頂点まで登りつめた水は滝になり、ほとんど垂直に崩れ落ちて、壁の足もとに泡立つ。それが見た眼には、高波が白い泡のキャタピラーに先導されて、進んでいるように見える。川底に変化が少なく、川幅も変わらなければ、このボーアはどこまでも進んでいく。アマゾン河の場合、流域が全体でひとつの

内陸湖とみなせるような平坦な水路なので、河口から八百キロも内陸にさかのぼって、逆流の現象が見られる。川幅は河口部で三百二十キロあり、ボーアはそこを一個の蛇に似た、空想上の生きもののように、上流に進んでいく。その高さは十メートルにも及ぶという。アマゾン河のほか、錢塘江、プティコディアック川、フーグリ川などのボーアが有名で、それぞれの場所により、イーガー、マスカレー、ボールとも呼ばれている。

しかし、テレビの映すボーアは、私にとって、子どもの頃に見ていた夢の津波と重なり合うものだった。ああ、この波だった、と肉身の亡霊と出会ったようなつかしさに鳥肌立っていた。

私は子どもたちに呼びかけてみた。

ほら、見て。あれが水なんだって。あんなに大きな波。あんなのがどんどん進んでくるんですって。こわいわねえ。こわいと思わない？ あんなものがここに来たら、どうする？

六歳の娘も二歳の息子も、テレビの画面に興味を示そうとはしなかった。

日曜の朝だった。私と子どもたちとのほかには誰もいない、誰が来ることもない日曜の朝、私はいつも昼近くまで眠り続けていた。眠っている間に、できれば日曜日などというつまらない一日は過ぎ去ってしまっていてもらいたかった。せめて一カ月に一度だけでも、土曜から来て日曜を子どもたちとゆっくり過ごして、と男に懇願し続けていたのは、一年以上も前のこと

だった。あなたとの子どもさえ生まれれば、そのぐらいいはしてくれると思っていたのに。普段の日の夜にせっかく来たって、子どもはとくに眠ってしまっているじゃない。毎週だなんて、言っではないのに。あなたの子どものなに。

けれども、下の子どもの父親となった男は一度も、週末を私のもとで迎えようとはしないまま、私には手の届かない遠い南の地方に立ち去って行ってしまった。東京には出て来る折りがきつとあると思うから、その時は二日でも三日でも泊らせてもらうよ。男はそんな言葉を言い置き、私はその言葉を忘れようとはしなかった。そして、日曜に、落胆して、寢床にしがみついていることもやめられずにいた。

アマゾン河のボーアはテレビの画面から消え、賑やかなコマーシャルに替った。

ボーア。私はその名前を忘れてしまわないように、何度も胸のなかで呟いておいた。ボーア。ボーア。

あれは何歳頃に見ていた夢だったのだろう。夢のなかの私自身を思い起こすと、七歳か八歳程度の年齢の姿をしている。

私は街を迷い歩いてた。一緒にいるはずだった三歳年上の、知恵足らずの兄を途中で見失ってしまった。街には人が多く、喧嘩ばかりしていた。路上に倒れる人、傷を負って血を流す人もいた。兄はなかなか見つからず、辺りの様子は荒れていくばかりだった。私は涙ぐみ

ながら、早足で歩き続けた。すぐに家に帰るつもりだったのに、と思うと、頭が痛くなり、涙がこぼれた。

街はまるで戦争のようだった。街から逃がれ、私はいつの間にか前方に現われた小山に向かった。そこには、家もなく人もいなかった。街を遠望できる草山だった。そして、兄がそこに一人でぼんやり立ちつくしていた。こんなところに来ていたんだ、と少し驚きながら兄のそばに行くと、兄は口を開けて、街の方を指差した。海の波の光っているのが、街の向こうに見えた。きらきら輝いていて、その上に蒼空が拡がり、見とれずにはいられない光景だった。ところが、それは急速に膨らみはじめ、街と人とを碎き吞みこみながら進む津波に変わった。呆気ないほどの短い時間に、私と兄のいる小山は一面の海のなかの島に変わってしまった。津波は更に、小山にも迫ってくる。逃げることもできず、私は兄と共に、眼前に伸びあがった青白い波の腹に見入っていた。

憶えているのはここまでで、たぶん、こわさに眼が醒めてしまったのだろう。

あれが津波というもの、と私ははじめて納得し、その力と大きさに怯えながら、眩しくきりめきながら進んできた水の美しさにも心を奪われた。それから続けて津波の夢を見、当時の私は、自分は本当に津波に襲われたことがある、と信じこんでいた。

兄がしばしば行方不明になったのは、その頃、実際に起こっていたことだったのだが、数年

後にその兄が病院で死んだ時には、津波も普通の波も、さざ波さえも、まわりに見当たらなかった。それから、私も津波の夢は見なくなった。

高い崖に挟まれて、山中の川は蛇行していた。頭上は鬱蒼と茂る木々の枝に閉ざされ、空がほんの少ししか見えず、その空も暗い色をしていた。河原に腰を下ろしていると、枝から虫が次々に落ちてきた。首や腕を赤く腫らして、葉をつけてもらっている人も、何人かいた。河原に下りて来た六十名ほどの大人と子どもたちは、思い思いに幾つかのグループに別れ、煙だけがやたらに多い焚火を囲んでいた。その朝まで、雨が降り続き、そしてまた、いずれ雨が降りだしそうな気配だった。山中は肌寒かった。それでも、子どもたちは河原で弁当を食べ終わるなり、急いで水着に着換え、川のなかに入って行った。私の娘も同様だった。取り残された下の子どもが泣きながらそのあとを追っていくので、私はあわててその体を抱きあげてから、靴を脱いで川のなかに入った。川の水は冷たく、なかに進むと、流れも案外、急だった。どれだけ、川の冷たさを耐えられるか、試してみたくなった。

まわりで、子どもたちが悲鳴のような甲高い声を響かせながら、水しぶきをあげていた。小石を拾い集めて、堰を作っている子どもたちもいた。その一帯の川底は浅く、真中でも、大人

の膝の辺りにまでしか、水は届かなかった。それでも水量は増えているということで、何人かの父親が川のなかに立ち、子どもたちを見守り続けていた。

足もとの川の流れだけを見つめていると、気持がぼんやりしてしまい体が水中に引き寄せられていく。二歳の子どもを抱いたままあやうく転びそうになり、私は川岸に引き上げ、子どもをそこに下ろした。小石と草の間に、おたまじゃくしがいっぱい泳いでいた。

私たちは早朝に都心を出発して、四時間後によく河原に辿り着いた。山道をマイクロ・バスで、河原を探し探し登ってきた。道の右手の谷底に川は続き、崖は切り立ち、覗き見える河原も狭く、六十名もの親子がくつろげそうな広い河原を見つけることはとても無理なように見えた。通り過ぎてしまったのかもしれない、とリーダーを務めている父親の一人が言い、よほど山道を登りつめてしまったから、二台のマイクロ・バスは同じ道をのろのろ後退しはじめた。春に一度、下検分に来て、適当な場所を見つけておいたのだが、そこへ下りて行く目印として憶えていた小さな橋が見つからない、ということだった。

おかしいなあ、この辺りだったと思うんですが、とリーダーは首をかしげ、もう一度、先に進んでみることを、バスの運転手に頼みこんだ。そんな橋、ありましたかね、五月から工事はじまって、この道もだいぶ様子が違ってしまっていますから、と運転手も私たちと一緒にあって、河原を探してくれた。バスに酔い、泣きだしている子どもが増えていた。民宿で無料で

差し向けてくれたマイクロ・バスに、三十人ずつの親子が無理矢理乗りこんでいる上、車が古くて、窓も開けられなかったので、子どもたちの気分が悪くなるのも当然だった。電車でも子どもたちに席を譲って立ち通しだった大人たちは、不機嫌に押し黙っていた。

娘が小学生になり、それまでの保育園と代って、日中、娘を世話してもらうようになった育成室のサマー・キャンプに、その年、私ははじめて参加した。育成室には、父親のいない子どもは珍しくなかった。母親のいない子どももいた。両親が勤めや店に出ている子どもたちが数の上ではいちばん多かった。育成室に通えるのは三年生までで、四年生になれば、私の娘もアパートで毎日、私と保育園に行っている弟の帰りを夜まで一人で待たなければならなくなる。けれども、私はそんな先のことは考えたことがなかった。娘の父親である夫と三年前に別れてから、男と知り合い、孕み、それまでの会社を辞め、赤ん坊が生まれてから、見るに見かねた知り合いの紹介で、小さな食品会社に事務員として勤めはじめた。

娘が育成室の一員になることに決まった時、私はその指導員に向けて、長い手紙を書いた。指導員の先生にしつこくまつわりついて、うるさいとお感じになることもあるだろうが、娘はそうした形でしか自分の信頼感を表わせないので、どうか、嫌わないでやって欲しい。娘はその人に甘えたいと思えば思うほど、しつこくいたずらをしたり、悪口を言ったりするので、今までも保育園の保育さんにうとまれてしまうことの方が多く、そうなると娘は手をつけられな